

微笑庵便り 2020年2月号

早朝座禅も続いておりましたが、季節も変わり3月になっていました。そしてちょうどその頃服部先生から、『三重に道場を作るから、来たければ来てよい』と声がかかったのです。すでに私は完全に彫刻にのめりこんでいましたので、一も二もなく、すぐさま気持ちはそちらに飛んでしまいました。ただ当時はまだ建物自体が建築中ですぐ行ける状態ではなく、一応入所の時期は7月ごろという事になりました。

7月まで4か月、「内弟子になってしまえば自由に何かできる可能性は当面なくなるだろう。だとしたら、それまでの数か月、多分今しかできないことをしてみたい」ということでその時に思ったのがなんと、「禅寺で修行してみたい。」でした。単なる門外漢にどうしたらそんなことができるのか知る由もないので、ともかく小池老師にお伺いをすると、白山ではそのようなことはして差し上げられないが、ここを訪ねてみたらどうか、と禅寺を紹介してくださいました。それが『臥龍山 両忘禅庵』千葉県茂原市にある禅寺です。大きな敷地の中に本堂、庫裏、舍利殿、禅堂を備え、青少年研修道場という事で、青少年や、社会人の研修合宿のようなことも行っていました。成田で外房線に乗り換え本納駅、そこから徒歩8分、大した距離ではありませんが、禅寺の厳しさはある程度知っていましたので、初めてそこに行った時は大そう心細かったのを覚えています。

当時当主は大木宗玄和尚、隠寮に大木琢道老子、そして賄の通いのおばさんが一人、そのほかに常駐ではありませんが庭師の方とお茶の先生がいました。何とも不思議といえば不思議なのですが、なんとその広い所に小僧さんのような人が一人もいないのです。たまたま私は誰もいない時期にちょうど飛び込んでいったらしく、何が何だか分からないうちにそこでの生活が始まりました。基本的には朝と晩に座禅があり、あとは一日中作務という事ですね。もうすることはいくらでもありました。掃除って言っても広大な敷地、草むしりや掃除はどれだけやってもきりがありません。そのほかに食事の支度等することもありました。和尚さんが外出することも多かったですし、怖い先輩がいるわけでもなく、厳しいルールがあるわけでもなく、だれが見ているわけでもない、そんな状況だったら人は一体どのような生活をするでしょうか・・・？

手を抜けばいくらでも抜けるわけですが、結局私はほとんど真面目だったように思います。なぜならそれは自分が望んだことだから。自分が望んで決めたことだから3か月は頑張る。誰が見ていようがいまいが手は抜かない、自分に言い訳をしたくないから、という事で、ともかく朝から晩まであれほど働いた？時期はないかもしれません。なんか不思議な禅寺生活でした。

